

講演集

授業と対話

東京大学教授 吉田章宏先生

富山大学教育学部附属小学校

演 題

授 業 と 対 話



東京大学教授

吉 田 章 宏 先生

- (略 歴) 1934年 東京, 神田に生まれる。
1960年 東京大学教育学部 教育心理学科 卒業。
1967年 米国イリノイ州立大学より Ph. D.
の学位を取得。
現 在 東京大学教育学部 学校教育学科 教授。
(著 書) 『学ぶと教える: 授業の現象学への道』 海鳴社
『授業の研究と心理学』 国土社
(編 著) 『授業』 朝倉書店
(共訳書) E. キーン著『現象学的心理学』 東京大学出版会
S. L. ルビンシュテイン著『一般心理学の基礎』全4巻 明治図書
D. P. オースベル著『教室学習の心理学』
黎明書房

はじめに

こんにちは、ただ今ご紹介いただきました吉田です。
一昨日モスクワから帰ってきました。十日間ほどの、生まれて初めてのモスクワ訪問でした。ロシア語は、25年ほど前に勉強したことがあるのですが、読むロシア語だけでしたし、しかも、ずっと怠けていたものですから、それもおぼつかない状態でした。それで会話はほとんど通じない。「こんにちは」とか「ありがとう」とか、いったようなことしか口から出て来ないという状態での、訪問でした。でも、モスクワの町を、思いっきり歩き回りました。たいへん楽しい思いをしました。昨年は、ヨーロッパで、学会が2つほどあったので、これも生まれて初めてヨーロッパを一回りしました。今度、モスクワに行ってみて、再確認したことは、言葉が通じない外国に行くということは、たいへん素晴らしい経験だということでした。言葉が通じないということは、人によっては、また、場合によっては、不安を覚えることです。いうまでもなく、言葉の通じないところへ行くということは、その人々が互いに話していることが全く何も分からない世界に行くということです。それで、言葉以前の世界に戻るということを経験するわけです。もちろん、正確に言えば、言葉の内容が分からなくても、雰囲気は分かります。怒っているのか、親しみを感じているのか、などということは、もちろん、分かります。それから、人の顔をみれば、どうも警戒した方がよさそうだとか、安心しても大丈夫そうか、などということも

判断はできます。でも、とにかく、外国で、言葉の通じない状態にあるということは、いわば、2歳か3歳の子供の時の状態に近づいている、といってもよいでしょう。つまり、外国に行くことによって、そういう子供の状態に近い状態に戻る体験をすることができる、というわけです。これは、たいへん愉快的なことです。いろいろな思いもかけない間違いをしたり、新しいことを発見したりしました。十日間を、おおいに楽しんで参りました。

モスクワでは、小学校を一つ、教育大学を一つ、研究所を五つほど訪問して、いろいろ議論をしたり、研究会議を開いたりしたわけです。小学校では、一年生と三年生の算数の授業を参観しました。モスクワ市の第91番小学校と呼ばれる実験学校でした。たいへん難しいことをやっていました。一緒に日本代表団でいらした私の先輩の大学の先生方が、一年生のクラスでやっている算数が、一体なにをやっているのかわからない、と戸惑った程度でした。これは、言葉が通じないから、ということだけではなくて、扱っている内容が、2進法、3進法、5進法、7進法・・・などを、面積の測定に用いるというたいへん高度のものだったからです。

ソビエトの子供たちも日本の子供たちと同じように、人懐っこく、かわいい子供たちでした。言葉は通じないながらも、親しげに近づいて来てくれました。私は、アメリカで五年間を過ごしたことがあり、アメリカ人のソビエト嫌いの時代をよく知っておりますので、私自身も、どちらかという、なんとなくソビエトという国に、ある距離感を感じていた、ということがありました。たとえば、「写真をうっかりへんなところでとったら、捕まってしまう、国に帰っては来れなくなる。」などということ、聞かされたりして、何となく遠い国という印象をもっていたわけです。しかし、今度行ってみまして、「地球はやっぱり一つだ」と感じました。また、子供たちの様子を見て、モスクワも、日本も、アメリカも、そして、ヨーロッパも同じだ、「子供は同じだ」という感想をもちました。人間は、共通したところを沢山もっている存在だ、ということ、強く感じました。

『宇宙からの帰還』

私の大好きな本で、学生さんや知人の方々に、よくお勧めする本がいくつかあります。その一冊に、立花 隆著『宇宙からの帰還』（中央公論社）という本があります。インタビューをもとに、宇宙飛行士のさまざまな体験をまとめた本です。たいへん客観的に、ルポルタージュ風にまとめた本です。皆様に想像していただきたいことは、宇宙船に乗って地球の外に出て行くことです。たとえば、月まで行って見る。そして、月に行く途中で、地球を見るということ、を想像していただきたいのです。そのような経験を実際にした宇宙飛行士たちが感じたことと報告されていることの一つは、地球とは実に奇跡的ともいえるべき貴重な存在である、ということでした。また、皆様も、写真などでご覧になったことがおありだと思いますが、地球の外から見たときに、地球がたいへん美し

い存在であること、そして、美しいばかりでなく、非常に壊れやすい存在である、いつ壊れてしまうかもしれないガラスのような存在である、ということでした。それまで、科学的な訓練しか受けていなかった宇宙飛行士たちの中にも、宗教的なあるいは詩的なものを感じたと話している人々が、多くいたとのことでした。パスカルの『パンセ』の中にも、そのようなことが書かれていたことを思い出します。

そういう立場からものを考えてみますと、地球の上で、私たちはたまたま日本というこの土地、この国に、生まれた訳ですけれども、もしかしたら、ちょっとした偶然で、モスクワに生まれたかもしれない、あるいは、アメリカに生まれたかもしれない、というようなことを、私自身、次第に感じるようになって参りました。そして、今、私は一つの可能性の現実化として、ここに来ているのだという印象を抱きます。それは、空間という観点からの、無限の可能性のなかの一つの現実性という意味です。

「ライフ・オブ・ユウ」

時間という観点からも、考えて見ましょう。「ライフ・オブ・ユー」というカレンダーをお持ちの方、あるいは、そのカレンダーのことをご存じの方、いらっしゃいますか。どなたも、いらっしゃらないようですね。「ライフ・オブ・ユー」というカレンダーがあるんです。私の持っているのは、1926年から2025年までのカレンダーなんです。一ヶ月分が1センチ四方位の所に収まっているカレンダーでして、1年分が一行になっています。私の生まれましたのが1934年ですから、誕生日のところに、正確に印を付けることができるわけなんです。そうすると、今、1990年ですから、2列目のほぼ真ん中よりちょっと上位のところに来ている訳です。で、私はこのカレンダーのあちこちに、印をします。例えば、私が生まれた日、国民学校に入った日、戦争が終わった日、など、などです。今日の日も、このカレンダーの全体のなかのどこかに一つ印がつくわけです。そして、また、例えば、恐ろしいことに、私の死ぬ日も、いつかは分かりませんけれど、どこかに確実にあるわけです。それ以降は、私はこの世には存在しない、ということになる訳です。もちろん、皆様のひとりひとりも、その点では、同じ訳です。そこで、仮に、百年をとって見ますと、大抵は、その中に人の一生の時間は収まってしまいます。そのなかで、私たちは、お互いの一生の時間が重なり合っているわけです。いや、その時間が互いに重なり合っているからこそ、同じ日の同じときに一つのところに集まることのできたのです。一般に、そういう在り方を、人間はしているのだ、と思われまます。そんなことを考えますと、私は、皆様とご一緒に、同時に、一つの場所に、たとえたった一回にせよ、集まることが出来たということは、これは僥倖に近いようなことではないかとも思われて来ます。そういう意味では、私の話を聞いていただくということは、何かのご縁でしょう。それも、このご縁は、思っているよりもずっと深いのかも知れない。そんなことも感じます。

こちらの、附属小学校の宗校長先生は、京都大学で教育哲学を学ばれたと、伺いました。また、附属小学校が、これまで、ドイツの教育哲学者ホルノーの「対話」という考え方、また、その教育哲学を中心として、教育実践に努めて来られたと、伺いました。そうしたことのご縁で、今回、私が呼んでいただくことになった、と理解しております。

ソビエトの家庭教育

モスクワで一つびっくりしたことがあります。これだけは、是非お話ししておきたいと思います。訪問の最後の一日が自由だったものですから、モスクワのトルストイ博物館を訪れました。自分で捜して行くのは、飛行機の出発までの時間では足りそうになかったものですから、タクシーの運転手さんに頼んで連れて行ってもらうことにしました。いろいろな経緯があって、最初に行った二つの博物館が閉まっていたので、三つ目の博物館まで連れて行ってもらったのです。その途中、話をしている内に、そのタクシーの運転手さんが、トルストイをよく読んでいるということを見つけたのです。とくに、「戦争と平和」と「アンナ・カレーニナ」をよく読んでいることを知り、驚きました。それから、もう一つ、空港まで送ってくれた、教育科学アカデミーの秘書の方とお話しているうちに、トルストイの作品が、普通の家庭で、母親たちによって、子供たちにたいへんよく読んで聞かされている、ということを知りました。それから、第三番目に、モスクワに来ていた、アメリカの教育研究者から聞いて知ったことです。彼は、ソビエトの子供たちとアメリカの子供たちとにインタビューをして、子供たちそれぞれが、何を考えているか、また、道徳とか人間についてどういうことを考えているか、ということ調べるといって仕事をしていました。その彼が言うには、ソビエトの子供たちが、アメリカの子供たちに比べて、極めて哲学的で、深く考えていることを知って、びっくりした、とううことでした。そうしたことを、いろいろ見聞きする中で、ソビエトの文化と伝統を大事にすることがたいへん重んじられている、ということ強く感じました。学校で、それから家庭で、その国の文化というものをどういう風に引き継ぎ、受け継ぎ、そして大事にして行くか、ということが問題です。そして、そのことが、ひいては、人間について深く考える子供たちをつくり、そして、世界についてものを良く考える子供を育てることにつながるのではないかと、そう思った次第です。現在のソビエトは、物質がたいへん貧しい状態にあります。日本で言えば、ちょうど敗戦後数年の日本と同じような、たいへん貧しい状態です。しかし、にもかかわらず、人々の心は豊かだ、ということを感じて帰って来ました。

授業のこと

授業の現象学

先程ご紹介がありましたように、現在の私は、「授業の現象学」を研究しております。私は、島小学校、境小学校の実践で広く知られている、斎藤喜博先

生に約十年間ついて、授業について学びました。斎藤先生から学んだことで、大事なことの一つは、「物事をありのままに見る」ということでした。これは、まるで、当たり前のごとで、何でもないことのように、あるいは、聞こえるかもしれませんが。しかし、「ありのままに見る」ということは、たいへん難しいことです。授業を見る際にも、授業を作っていく際にも、「ありのままに見る」ということが極めて難しいということ、実践に学ぶ中で、私は学んだのです。それと共に、同じことが、学問の世界でもあって、「ありのままに見る」ということをするための学問があるということ、知ったわけです。それが「現象学」という学問でした。そして、「授業の現象学」を私の課題にするようになりました。先生方は、教師というお仕事から「授業とはこんなものである」とか、「子供とはこういうものである」というお考えを次第に作って行かれるものだ、と思います。その考えが、専門家として、たいへん貴重であり、お仕事のうえでの中心の柱となって、ご自分の仕事を支えるということがあるに違いない、とも思います。しかし、それと同時に、そういう専門家としてのお考えゆえに、かえって、物事が見えなくなってしまう、ということもあるのだ、ということ、斎藤喜博先生のお仕事に学ぶなかで、次第に私は学んでいったのです。

それで、ここでは、「授業と対話」ということで、授業についての私の考えを述べさせて頂きたいと存じます。

授業とは何か

「授業とは何か」を一言で言え、と言われたときに、私は次のように自分の中で理解するようになってきた、ということがあります。その理解とは、「授業とは、教師の世界と子供たちの世界との出会いと別れの場である。」というものです。教師の世界と子供たちの世界とが出会う場が授業である、とすれば、出会いには必ず別れがある。そして、別れというものを見通しながらその出会いを最大限に充実させて生きよう、最大限に充実させて生きることによって、子供の世界を豊かなものとし、子供の世界を豊かにすることによって、自分自身の世界を豊かにしていくという働きかけをする場が、先生にとっての、教師にとっての、授業という場であり、その場の歴史を生きて行くのが、教師の生である。そんな風に、私はとらえます。

教師の世界

では、教師とは何でしょうか。これには、言うまでもなく、様々な理解の仕方があるかと思いますが。たとえば、一つの職業、聖職者、労働者、子供の管理者、文化の伝達者、教えることの専門家、などなど。それぞれの理解は、「教師」のある一面を表しているのだと思います。そして、それぞれの理解がまた、そのように理解する理解者の世界をも、表しているのだと思います。

ここにいらっしゃる皆様方は、「教師」とは何かということについて、それぞれに、ご自分の理解を持っていらっしゃるかと思います。そして、それぞれの理解には、それぞれの歴史があるに違いないと思います。同様に、私自身

の「教師」についての理解にも、ささやかながら、それなりの歴史があります。例えば、大学で、教育心理学を専攻するようになって、ある時期までは、「教師」の仕事専ら「知識の伝達」の専門家として、理解していたように思います。現在の、私の理解は、おおよそ、次のようなものです。つまり、教師とは、「こどもと共に育つことを〔自らの〕の仕事としている人」。「共に育ちませう」とは、大正から昭和にかけての優れた教師であった、芦田恵之助の碑に残されている言葉です。教師の仕事である、「教育」を「教えて育てる」こととしてとらえるのみでなく、むしろ、「共育」、つまり「共に育つ」こととして理解することを、私はそこから学びました。恵之助は、「教育」は「子供と一緒に自分も育つこと」ないしは、「自分が育つことを通して子供も育つ」というとらえ方をされました。私は、斎藤喜博先生、武田常夫先生などの実践者の方々に直接に、授業について学ぶようになり、その中で、「教師」を「授業の専門家」として理解するようになりました。さらに、林竹二先生に学ぶなかで、授業は「教師と子供と一緒に生きる場」であるとし、「教えることだけが教師の仕事」なのではなく、教師の仕事で一番大事なことは、「子供と一緒に学ぶことだ」、と理解するようになりました。

そして、また、私は、ある時期から、現象学に学ぶなかで、教師も子供も含めて、人間ひとりひとりが、それぞれの世界を生きていること、授業においてそれぞれの世界が変わること、また、授業は、それぞれの世界を豊かにするための営みである、と理解するようになりました。そうした理解から、現在の私は、「教師とは、こどもと共に育つことを仕事としている人」だとの理解をするようになりました。このように理解しますと、「教師」は何よりもまず、「教師」であるまえに、一人の「人間」であることが求められます。実際に子供と接する中では、教師は、子供にとっては教師という役割をもった一人の人間として現れて来ます。教師は、ただ単にその役割にのみ閉じこもることができない。自分では閉じこもったつもりでも、閉じこもることは完全にはできないのです。一人の人間であるということが、どうしても、現れてくる。そして、そうした「教師」の仕事に求められているのは、絶えず再生する、生まれ変わる、生まれ変わることを通して育って行く、そういう人間として、極めて豊かな世界を生きることである。そういうことの全てが、全体として、統一的に、見通しよく、私には理解されるようになった、と思います。

ひとりひとりの世界

人間ひとりひとりそれぞれに独自の世界を生きています。しかし、このことは、日本のように、「ツ－と言えばカーと分かる」世界では、つまり、黙っていても、分かりあえるのが当然とされる世界では、必ずしも日常の生活の中では、痛感されてはいないように、思われます。むしろ、自分は他の人とは異なった独自の世界に生きているのだ、ということあまり前面に出し過ぎます

と、仲間外れにされてしまうことさえ、起こりかねません。そういう雰囲気も、他の世界、例えば、アメリカの社会などと比較してみると、強く感じられるように私は思います。私たち日本人は、いつの間にか、お互いに同じことを感じ、共通のことを思い、また、考えているのだと、前提してしまって、互いに話しているといったところがあるように思います。

言うまでもなく、確かに、私たちは、共通の世界を生きています。例えば、時間は、過去から、現在、未来へと、流れていくという、生きられた時間の構造は、共通していると、ということがあります。お互いに人間である以上、そういう共通の側面があるわけです。しかし、人間ひとりひとりが、互いに異なる世界を生きていくということについての研究が、最も進んだのは、精神病理学の世界であろうかと思えます。現象学的精神病理学という学問があります。精神病患者、精神病の患者さんにとって、世界、時間、空間、他者が、どんなふうに見え、どんな風に感じられるかということについて、たいへんな苦労を重ねて、詳しく研究されて来た、そういう研究領域です。例えば、ある精神分裂病の患者さんにとっては、あるときには、ほかの人がまるで機械的なゼンマイ仕掛けのお人形さんのように見えたりすることがある、ということが知られています。そうした、恐怖に満ちた世界に生きていることから、普通の人から見れば、極めて奇怪な行動をとること、などが理解されるようになりました。ですから、患者さんにとっては、むしろ、周りの人々が平気であること自体が不思議に感じられるであろう、ということも理解されて来ます。そうしたことを理解できる立場とは、人間ひとりひとりの生きている独自で、異なる世界についての理解が深まり広まった立場である、と言えるでしょう。それは、多様な人間の在り方についての理解ができるようになることを、意味しているのです。こうした学問が、発生した源は、いろいろあると考えられますが、その一つが、ユクスキュルという生物学者の研究〔ユクスキュル著 日高敏隆・野田保之訳『生物から見た世界』思索社、1973年、参照〕でした。ダニにとっては世界はどんなふうに見えるかとか、あるいは、かたつむりにとっては世界はどんなふうであるか、といった研究がなされています。イヌにとっては、匂いが極めて重要です。あそこにあんな匂いがする。ここにはこんな匂いがする、ということで、イヌにとっての世界が成り立っている、ということを発見したのです。

皆様の中には、カフカの「変身」という小説に描かれた主人公の世界をふと思い起こされた方もいらっしゃるかも知れません。主人公のからだだが、人間のからだではなくて毛虫のようなからだになってしまった時に、世界がどんなふうに変化するかということを描いた小説です。そうした、想像の世界を含めて、人間のさまざまな在り方、その在り方のなかで現れてくる生きられた世界の違いに、目を向けさせてくれたのが、ユクスキュルの生物学に一つの源を持つ、

現象学的精神病理学の研究だった、と言えるでしょう。こうしたことは、教育に携わっていらっしゃる先生方には無縁のことだ、とおっしゃる方が、あるいは、いらっしゃるかも知れません。が、それは、決してそうではありません。なぜなら、先生方は子供たちを相手に生きていらっしゃる、からです。先生方は、子供たちと毎日の仕事をなさっているわけですが、ひとりひとりの子供は、ひとりひとりの独自の、異なる世界に生きている、のです。そして、たった一つの事柄についてでも、子供たちみんなと一緒に考えて見よう、という時には、ひとりひとりの子供は、それぞれ異なる世界に生きているが故に、それぞれ違ったふうにとらえているということがあるのです。したがって、ひとりひとりの子供が、ひとりひとりの人間として、どのような世界に生きているのか、そして、具体的なその事柄を、それぞれがどんなふうにとらえているか、ということを生き生きと理解することを通して、それぞれの子供の生きている世界がどうであるかということを理解することが、先生方のお仕事には、求められているのだと、私は考えるのです。

もし、そういうことが、教育の世界で生まれれば、実はそれは、子供がどんなふうに物事をとらえ、どんな世界に生きているかということのみが問題になるのではなくて、さらに、先生方のひとりひとりが、人間として、どのような世界に生きておられて、そして、どんなふうに物事をとらえていらっしゃるか、ということも、また、当然、視野のなかに入って来るでしょう。

さて、ここで、中 勘助の『銀の匙』のなかに出て来る、主人公と、なかの悪いお兄さんとの「星」と「お星さま」の間のやりとりが思い起こされます。釣りに行ったあと、帰りの途上、二人のやりとりがあります。その箇所をちょっと読んでみます。

「しかられしかられして疲れきった足にあとから小走りしてゆくのだが、遠い道を遠くして歩くのでまだ家近くならないうちに日がぐれてしまう。そのときの不愉快と不平……のうちに夕べの空にひとつふたつかがやきはじめる星、それは伯母さんが神様や仏様がいらっしゃるころだと教えたその星を力になつたくしくみとれていれば兄は私のおくれるのに腹をたてて／「なにをくずくずしている」／という。はっと気がついて／「お星様をみてたんです」／というのをききもせず／「ばか。星っていえ」／とどなりつける。あわれな人よ。なにかの縁あって地獄の道づれとなったこの人を にいさん と呼ぶように、子供の憧憬が空をめぐる冷たい石を お星さん と呼ぶのがそんなに悪いことであつたらうか。」(中勘助 『銀の匙』 岩波文庫 135ページ)

二人は兄弟です。兄は星を見て、「星っていえ」、つまり、「お星さまなどと言うな」、という訳です。これ対して、弟は、主人公で著者の勘助がモデルとなっている子供です。その弟は、星を見て、「お星さまをみてたんです」と言った。やりとりしては、たった、それだけのやりとりなのですけれども、そこに

は既に、幼い子供の間には見えられない、それぞれが生きている世界の大きな違いが、たいへん鮮やかに現れています。もちろん、それぞれに、正当性があります。どちらが正しく、どちらが誤っている、などということはありません。しかし、人間の在り方についていうならば、「宇宙物理学の最新の知識と、ハイドンのオラトリオ『天地創造』とが、ひとりの人間のうちに共存できないとしたら、人間はどんなに貧しい存在になってしまうことだろう」（霜山徳爾著「人間の詩と真実」中公新書、1978年）、という思いに、つなげて行くのが、恐らく、教育の仕事の本質なのでしょう。

現実の二人の幼い子供に、既にこのような違いがある、ということを理解しないでは、一つのことについて、同じことを教えて見ても、それが、子供の世界に、どのような微妙な変化を生むのかということについて、先生方が理解できるようにしようとは、とても思えないのです。

一人一人の子供の世界

授業の中で、子供を本当に理解していらっしゃる先生方は、たった一つのことについて、作業を進めたり、学んだりする中で、必ずや、一人一人の子供の世界の在り方というものを、微妙な子供のさまざまな反応の中に認めて、一人一人の子供がどんな世界に生きているかということを描いて、授業をなさっていらっしゃるに違いない、と思います。

子供に教えるという困難な仕事

そうすると、そうした一人一人の違う世界に生きている子供たちに、物事を教えるという仕事は、容易なことだ、ということが明らかになって来ます。先生である教師、子供に教える仕事をしている方々が、子供たちと出会うとき、子供の時の自分と同じような子供も少しはいるかも知れません。その場合には、自分が子供の時、どうであったかということに思いをいたせば、ある程度は、子供のこともわかるかも知れません。しかし、ほかの大多数の子供たちは、子供時代の自分とは違う子供たちです。これは、自分が、子供時代に、決してすべての子供を代表できる子供ではなかった、ということを描いてみれば分かることです。子供時代の自分とは、全く異なる世界に生きている子供たちが大多数である、ということは、容易に理解され、納得されるでしょう。

そうすると、専門家としての教師は、一人一人の子供が生きている世界についての理解をもつことが求められる訳です。このことは、何を意味しているのでしょうか。それは、子供を理解する、という場合に、一般的な理解では済まない、ということの意味をしています。例えば、一年生はこういうもの、二年生はこういうもの、などなど、一般的な発達理解では、済まないのです。そうではなくて、具体的に、ひとりひとりの子供が、この教材の、ここを読んだ時に、どんな受け取りかたをするか、感じ方をするか、考え方をするか、ということが理解できなければならない、という大変な課題を突き付けられたこととなります。

これは、無理だ、不可能だ、とおっしゃる方がいらっしゃるかもしれません。

しかし、そう言ってしまうことは、ちょうど、精神科のお医者さんが、患者さんと出会い、患者さんを理解しようとするときに、そんな一人一人の患者さんを理解することはできない、と言ってしまうのと同じように、専門家である教師としての仕事の大切な部分を放棄してしまうことになるのだ、と思います。それは、たいへんではあっても、教師の仕事として、引き受けなくてはならない仕事なんだ、そう思うのです。

先生は、かつては子供でした。先生だけではなくて、大人のすべてがそうでした。そして、今、大人である先生が、大人として、そして、教師として、子供たちと出会っているわけです。

「今、子供時代を
生きている人」

その子供たちをとらえるのに、いろいろなとらえかたがあると思います。その一つは、子供としてだけ、現在の姿においてのみとらえる、というとらえかたです。しかし、別のとらえかたがあります。さきほど、「ライフ・オブ・ユー」というカレンダーのお話をしました。そして、壊れやすい星、地球の話を行いました。その壊れやすく、宇宙の中で極めて美しい存在である地球の上で、極めて稀な偶然によって、お互いに出会っている、人と人、それが、子供と私である。そういうとらえかたもできるかと思います。そうしたとらえかたからすれば、子供は、「今、子供時代を生きている人」、というふうにとらえるべきではないか、と思うのです。つまり、私は、かつて子供時代を生きた人間である。この人たちは、今、子供時代を生きている人たちである。そうとらえるべきではないかと思うのです。そうすると、今、子供時代を生きている人たちと、かつて子供時代を生きたことがあり、今、大人時代を生きている私とが、出会い、その出会いから何が生まれ、それぞれの一生にとって、それは、どういう意味をもつだろうか、ということ、考えずにはいられなくなるのでしょうか。

「自分を要らなく
する仕事」

教師の仕事について、30年ほど前に、私は先生から教えられた事があります。それは、「教師の仕事は、教師としての自分を一生懸命に努めて要らなくする仕事である」という教えでした。つまり、努力して、自分を要らなくするのが、教師の仕事である、というのです。私は、出会いの始めには、必要とされている、つまり、「要る」わけです。そして、別れる時には、必要とされない、「要らない」存在である、そうなるように努めるのが、教師の仕事である、というわけです。子供と出会って、最初から必要でないなら、これは、子供にとっては教師ではない、ということでしょう。私の存在によって、子供の生きている世界が豊かになる可能性があるからこそ、私は、教師である訳です。しかし、仮に、私が最初と同じように、ずっと最後まで必要とされていたとしましょう。すると、それは、私が、子供の世界を豊かにすることに失敗したことを、意味するのでしょうか。やや、単純化し過ぎた言い方も知れませんが、子供の世界と出会うとき私が必要とされていて、別れるとき、私が必要とされなくなるように、そのように努力するのが、教師の仕事である、とも言えるかと思います。

「子供と同じように
分からなく」
なれること

その中で、一人一人の子供は、生きている世界が違うということに対応して、必要としていることが、みなそれぞれに違う訳ですね。その違いを悟るためには、どうしても、一人一人の子供がどんな世界に生きているかということを実感することができなければならない。そんなことが、教師の仕事に求められています。

さきほど、教育の仕事は子供と「共に育つ」ことである、と申しました。このことは、例えば、ある教材を授業で教えるという場合には、何を意味するのでしょうか。教師は、一人の人間として、その教材についての理解をもっており、また、教師としての専門的な理解もっています。それが前提にあって、子供に教えるということが始まります。しかし、「共に育つ」ために、次に求められることは、そうした前提を背景にしながらも、つまり、今の今までよく分かっていたその教材を、今度は、子供と同じように全く分からなくなるという経験もできなければならない、ということです。これは、容易なことではない、と思います。つまり、よく分かっていた易しいことを、一人一人の子供と同じように、多様な仕方では分からないということを経験することができるということは、たいへんなことを意味するわけです。

これに近い経験を探すとすれば、例えば、こんな経験がそれに近いでしょう。日本語だけしか知らないとします。そして、言葉を知らない世界中のいくつもの外国を訪れ、誰の助けも借りずに、旅行して歩く。分からないことばかりで、わからなくて困ったという状態を、つぎからつぎに経験する。これは、子供が、多様な仕方では分からない状態を、歴訪しているのに、近い経験だとも言えます。もちろん、これは、比喩ですし、比喩の限界はある訳ですが・・・。

より、正確に言えば、一つの教材を授業で教える時に、一人一人の子供にとって、その教材のどこが、何が、どんなふうに分からないのかということを生き生きと想像できる先生は、素晴らしい先生なのだ、そう私は理解するのです。

童心の世界からの
再出発

それは、いわば童心の世界、分からない状態に戻ることを意味する訳です。それだけでも大変な仕事です。しかし、先生の仕事は、それで終わる訳ではありません。童心の世界に戻るだけでは、まだ、教えることにはならない訳です。分からない状態に戻った上で、そこから出発して、今教えようとしていることが、分かるような状態になって行く過程を、自分で辿ることができることを、求められる訳です。

しかも、その辿る道の先には、優れた芸術の世界や、高度な科学の世界が存在しており、いまこの道が、そうした世界にどうつながって行くかということについて、十分な自覚と見通しをもちながら、その第一歩を歩むことができることが望まれている、ということの意味しています。

芸術・科学の再創造

つまり、第一には、童心の世界に帰りそこから出発すること、第二には、芸術や科学の原点に立ち戻って、そこから出発すること、を意味します。この第

二の意味は、第一の意味に重なっています。すでに出来上がってしまっているように見える、芸術や科学、学問を、その最初の出発点となった原点に立ち返って、子供と一緒に作り直す、ということの意味をしています。これは、科学と芸術を再創造するということの意味している、と言えます。

この二つの意味をもつ仕事は、大変な仕事であることは、言うまでもありません。

まず、子供の世界といっても一様ではありません。「星」という子供もいれば、「お星様」という子供もいます。一人一人が歴史をもち、個性をもっているのです。「星」と「お星様」の違いは、ただ、天体という一つのことを巡って、子供の違いがあらわになったということであって、その違いを生み出した背景を考えてみれば、その背景の違いはたいへん大きな違いかも知れないのです。子供の目をもって見るということが出来るためには、極めて柔軟な心が私たちに求められます。

さらに、仮に、到達すべき目標が、たとえ私たちにとっては容易で自明な内容の事柄であったとしても、子供の世界から出発して、そこに到達するという事、つまり、科学や芸術を再創造するということは、これまた、容易なことではありません。

たとえば、ピタゴラスの定理を証明するとします。ピタゴラスによる証明の仕方が、ある訳ですが、しかし、一人一人の子供の世界を背景として、ピタゴラスの定理を証明するということは、ただ単に、ピタゴラスの証明をなぞることではない訳ですね。それは、それ自体、新たな創造的な仕事です。

今日の算数の研究授業で、関数の関係を扱っていました。おはじきの並べ方から式を求めるのに、三つほどの考え方が出されていたかと思います。それぞれの考え方について、その考え方をたいへん分かりやすいと考え、ほかの考え方を分かりにくい、と考える子供が、それぞれいるということは、容易に想像されます。そして、一人一人の理解の仕方に対応できるだけの準備に努める中で、先生は、あのような3種類の考え方を、用意なさったのだと思います。

そうした、日々の営みを通して、学問の再創造が、授業の中で行われていることになります。これが、授業という仕事なのだ、そう考えられます。授業は、ただ単に、出来合いの知識を子供の頭に詰め込むとか、あるいは、子供に用意された正解を暗記させるというような作業ではないのですね。

高橋金三郎というたいへん立派な先生がいらっしゃいます。先生も、授業は学問を吟味するプロセスなのだ、とおっしゃっています。小学校の理科の授業で、実験すると、なかなか、教科書に書かれている通りには行きません。すると、教師も子供たちも、自分の実験のやりかたが間違っていたのだろうかとか、自分たちの実験が厳密でなかったから、結果が違ってしまったのだろうかとか、考えてしまいます。そして、自分たちの実験の結果は違ったが、教科書に書いて

あることが兎も角正しいのだ、と考えることが、ごく普通のことのようです。しかし、もし、実験の事実を本当に大切にするという立場を貫くなら、自分のやった実験では、教科書に書いてあることと違うとわかったら、果たして、教科書に書いてあることは本当に正しいのだろうか、大丈夫なのだろうか、そう考える過程が、そこで始まる筈です。それは、私たちの文化の中で、伝承され、継承されてきたものが、本当に確かなのか、大丈夫なのか、つまり、本当に本当なのか、ということを確認する仕事になる筈です。もちろん、結果として、やはり、自分の結果が間違いだった、ということが確かめられるかも知れません。しかし、そのこと自体、やはり、継承されてきたものの確かめであることは、少しも変わりがありません。

このことは、教育の世界で、文化が、繰り返し繰り返し、吟味されていることを意味します。そして、そこで吟味されたことが、人間の歴史のなかで、これこそ本当のことと言える遺産として、次の世代に受け渡されていくものとなる。授業は、文化、学問、芸術の吟味をしている場なのである。そういう意味のことを、高橋金三郎先生は、おっしゃっています。私は、この考えに、全く賛成です。

以上のように考えて来ますと、人間としての教師があるべき成長を遂げた世界は、極めて豊かな世界である、ということが見えて来ます。それは単に定められた教育内容と、それを教える教育方法・技術を習得し、蓄積することには決して限られていない世界であることが分かって来ます。そうではなくて、人間の文化を、子供たちと共に、その根源までさかのぼって、そこから、繰り返し、しかも、極めて多様な仕方で再創造し、再吟味し、検証し続ける。文化を繰り返し再確認し、根底から再保証し続ける、そうしたことを通じて、一人の人間として、豊かに成長して行く世界です。子供に教えるということは、子供と共に育つことであり、そして、それは、子供の生きる世界に立ち返りつつ、子供と共に、人間文化の創造者たちの世界を生き直すこと、言い換えれば、文化の起源から文化創造の世界を繰り返し多様に生き直すことです。これは、フッサールという現象学の創始者が、文化の「再活性化／蘇生化」（フッサール著『幾何学の起源』参照）と呼んだ事柄に当たります。教師の仕事は、文化の「再活性化／蘇生化」を繰り返し行うことによって、人間として、最も豊かな生を生きる可能性を秘めた仕事である、ということが明らかになってきます。授業とは、そうした場である。そう、私は理解するのです。

『真の授業者をめざして』のこと

私の尊敬する実践者、故人である、武田常夫先生の書かれたご本に、『真の授業者をめざして』（国土社）という本があります。これは、武田先生が、24歳のとき、斎藤喜博先生のお仕事に憧れて、島小学校の教師になるところから始まり、それから17年間の間に、教師としてどんなふうに努力し、何を考え、授業をどのように追究していったかということ、回想的に記している書物で

「教えないことが
教育だ」

す。この本のことだけをお話ししても、2時間や3時間ではとても足りません。その中から、一つだけ、お話してみましよう。

武田先生は、たいへん優しい方です。それで、初め、子供に親切にすることが、教師の仕事である、よい教師の条件である、と考えていらっしやっただけです。だから、子供が聞きに来れば、一生懸命教えます。子供と一緒に遊ばず。そして、子供と共に歌を歌い、学級新聞を作る。子供とたいへん仲がいい先生です。教室のなかは、いつも笑いで満ちています。先生は、そういう学級が理想であると思い、また実際にそういう学級をおつくりになったようです。しかし、あるとき、同じ島小学校の赤坂里子先生の学級を、赤坂先生が産休をおとりになったということで、代わりに担任された、ということがあったのです。武田先生がご自分で育てた学級ではなくて、赤坂先生の育てられた学級の子供たちと出会ったときに、その子供たちが、それまでに自分が出会ったことのないような子供だちだということに気付くのです。それは、たいへん自立心の強い、「毅然」子供たちです。武田先生が、こういうことをしたらいいな、と思った時には、もう既に、子供たちが自分で考えてその先のことをやっている。ほっておいても、常に自分で考えて、先に先にと進んで、自分で自分を鍛えて行くということをしている。武田先生は、そのことに圧倒され、愕然とする共に、なぜ、こうなっているのか、と不思議に思う訳です。今まで、自分は子供たちに親切にし、自分なりに全力を尽くして、一生懸命に教えて来た。そうすることがよい教師だと思い、また、自分にはそうすることができると思い、そうすることで、子供を育てている、と思っていた。ところが、自分は、この赤坂先生の学級の子供たちのような「毅然」子供たちを見たことがなかった。そう気がついて、愕然とするのです。そして、こんな文章を書いていらっしやいます。

「教えないことが教育だ。教師が教えたいとねがうことをむしろ惜しんで惜しんで惜しみぬくことが教育だとわたしは思った。教師が惜しめば惜しむほど逆に子どもはみずからの意志と行為のいっさいをあげて教師に接近する。その出会いの中に真の教授が成立する。怠惰であるということは、教師がみずからの主体と責任において惜しみぬくことである。」(武田常夫著『真の授業者をめざして』国土社 1971年、43ページ)、その少し前の箇所に、「教師は怠惰でいい。いや、怠惰でなければならないという奇妙な思念が芽ばえてきた。」(同上)とも書いていらっしやいます。

武田先生ご自身も、教師が怠惰でなければならないという考えは、極めて「奇妙な思念」であるとは、その時は、思う。若い武田先生は、初めて、教えるということの本質について、これまでの自分の考えとは違った考えを、自分の経験の中から学んで、絞り出して行ったのです。それは、教えないことが、教えることである。教えたいと思えば思うほど、そのことを、惜しまなければ

ならないのだ、そういう考えを、実践の中から、愕然とした経験の中から、生み出して行ったのです。

「教育の極意」

ここで、「教育の極意」というようなことがあるとすれば、それはなにか、ということに、思い至ります。

芦田恵之助が書いています。教育の極意は、子供が自ら進んで学ぶという構えが出来上がることである、と。このことを、芦田は「発動的学習態度」と呼んでいます。つまり、ほっといても自分から学ぶような、また、自分で学ぶことができるような子供、そういう子供を育てること、それが教育の目標であるし、それには、どうしたらよいかを掴むことが、教育の極意を掴むことなのだ、ということだと思います。先程、教師の仕事は自分を要らなくする仕事だ、と申しました。そのこととも、つながっていると思います。教えるということ、親切にすべてを教えてあげることである、と考えていることの裏には、もしかすると、自分を要らなくすることに対する恐れもあるいはあるかもしれない、そんなことも考えさせられます。

本校では、「追究を楽しむ子供」を目標にしていらっしゃると同っております。追究を楽しむということは、子供たちが、追究を楽しむようになれば、ほっとおいても、自分で追究して行くでしょうし、自力で、「発動的に」、追究していくということにつながっているのではないかと思います。

「授業の現象学」 研究

教師は、自らの授業体験を通じて自らの世界を豊かにし、教師としての成長を遂げていく存在であると言えるでしょう。私の考える「授業の現象学」とは、そのような授業の研究であり、授業体験の研究であり、授業の場で起こる歴史的な出来事の総体の研究であり、そして、それは、もっとも豊かな、人間の、人間による、人間のための研究である、と考えるのです。

対話のこと

対話とはどういうことでしょうか。私は、こんなふうに理解しています。

対話とは、他者と出会い、心を開いて語り合うこと、相手の語るところに耳を傾けてよく聴き、聴きあうことによって、自らを相手のなかに見だし、また、未知のものを相手に見だし、驚き、喜び、互いに自らの生きる世界を豊かにして行くこと。

授業は、前述のように、そこに参加するそれぞれの人間たちの「生きられた世界」の出会いの場です。一人一人の子供は、授業を通じて、多様な世界との「出会い」を生き、そのことにより、自らの「生きられた世界」を次第に豊かにしていく。「授業を通じて」とは、教材、教師である「先生」、ほかの子供たち、それら総てとの「出会い」を通じて、ということです。

「梅の花」のこと

子供は、子供時代の「出会い」を、一生の間、記憶している可能性があります。ここで、子供の世界と大人の世界のそうした「出会い」の典型あるいは原型として、私の強い印象に残っているものに、井上靖の作品『幼き日のこと』

(新潮文庫) 中の次の挿話の記述があります。

作中、幼い時の「私」に梅の花の匂いを嗅がせた中年の男の人の思い出が語られています。その人は、訪ねて来ると、幼い「私」の相手になってくれたのです。

「私はその人物に特別な好感を持っていた。その人が来ると、何か楽しいことが身边に近寄って来るような思いを持った。／ある時、その人は私を連れて歩き、梅の木のあるところへ行くと、私を抱き上げては、私の顔を梅の花の傍に持って行くようにした。／……いい匂いがするだろう。／……うん。／更に、他の梅の木のところへ行って、／……じゃ、この梅の方はどうだ。／……いい匂いがする。／……うまいことを言って！ほんとか！／おそらくこんなやり取りがあったのであろうと思う。こんなことのためか、いつとはなしに、私は梅の花を見ると、顔を梅の花の方へ持って行くような癖を身につけてしまった。現在も、庭の梅が花をつけると、時々その匂いを嗅ぐし、幼い者でも傍に居ると、曾て自分がされたように、抱き上げて、梅の匂いを嗅がせてやる。自分の場合のように、いま自分が抱き上げてやっている幼い者がこのことを憶えているかも知れないと思うと、ある楽しさがある。甚だ当てにならぬ賭けではあるが、幼い者の心に、梅の花の匂いという時限爆弾でも仕掛けているような気持ちである。／……いい匂いがするだろう。／……うん。／甚だ不得要領な顔をしているが、案外このことを憶えているかも知れないと思う」(前掲書、82～83ページ)。

ここでは、子どもは、それまで何の関心も興味もひかなかった「梅の花」とその「匂い」に、ある大人との「出会い」を通じて、興味を抱くようになります。そして、それは子どもの生きられた世界に位置づけられるようになります。この子供の生きられた世界に生じた小さな変化は、一生の間、繰り返し蘇ってくるのです。そして、その時々の意味は次第に沈澱して積み重なり長い歴史を持つに至り、その意味の歴史は、大人になった「私」の現在の生きられた世界の根底を成すに至るのです。しかも、その子が大人になった時、その子は一人の大人として、次の世代の「幼き者」の生きる世界に、かつてのあの「ある大人」がしたのと同じような働き掛けをするようになります。こうして、「梅の花とその匂い」とそれにある意味を見いだす世界が、世代から世代へと引き継がれていきます。もし、この挿話に、このような意味があるとすれば、ここには、共に生きる人間と人間との「出会い」と「対話」の典型、狭く言えば、教育の内実をなす大人と子どもの「出会い」と「対話」の原型、が描かれていると私には思われるのです。

ここで、幾つか、直ちに気がつくことがあります。第一に、子どもである「私」がその人物に「特別な好感」を持っており、「その人が来ると、何か楽しいことが身边に近寄って来るような思いを持った」という点です。そうした

「好感」がその根底的な気分としてあり、近寄ってくる「何か楽しいこと」の一つとして、「梅の花とその匂い」が受け止められていた、ということです。第二に、最初、「私」は「うん」と答えはしたものの、必ずしも、直ちに「いい匂いがする」と納得できた訳ではなかったのでしょうか。恐らくその時も「不得要領」であったのでしょうか。でもそこに、「私」は「なにか楽しいこと」があるとは感じたということ、そして、そのことが、「いつとはなしに」「癖を身に着け」させたということ、つまり「私」の世界を豊かにする永続的で確かな変化をもたらされたということです。第三に、そうした「私」の意味の歴史を背景に、現在の大人となった「私」は、「曾て自分がなされたように」幼い者に匂いを嗅がせることに、「ある楽しさ」を感じ、これから幼い者が歩む遠い道程に思いを馳せ、「時限爆弾でも仕掛けているような気持ち」を感じているのです。ここには、人間と人間が旅としての生という道を共に歩むという世界を生きる在り方、またその時々、共に歩む仲間の存在が持つ豊かな意味が、現れている、と私は考えます。

人間と人間の出会いと対話。たとえ相手が子供でも。いや、相手が子供であるからこそ。時間を越えた、このときにのみ可能になった出会いと対話。そして、この後、意味をもち続ける出会いと対話。私の生を、その意味で、充実させてくれる出会いと対話。

ミラン・クンデラは地球を「経験不足／未経験の惑星」と呼びました。私たちは未知の世界に囲まれ、常に未経験であるが故に、対話により共に生きて行くことが、求められているのです。だが、私たちは、うっかりすると、割り切りと、決め付けに始まる、利害と目的のみに心を奪われた在り方に、墮落して行きがちなのです。例えば、いわゆる「ベテラン教師」とよばれる先生は、教職について最初の頃、教室に立たれたあの時の、新鮮な驚きとおののきと、おそれというようなものを、もう既にお感じにはならなくなって、今日も同じ、あしたも同じ、「授業はこう」、「子供はこう」とすべて「分かり切ったこと」として、「割り切って」お感じになる、ということが起こる場合があるのではないかと思います。真の対話を可能にするためには、そうではなくて、いつも新鮮な思いを繰り返し生み出していくことが求められているのだと思います。クンデラの言う「経験不足／未経験の惑星」という言葉には、「経験不足／未経験である」ということが、人間存在の基本的な性格であるという意味が込められています。人間は、たった一回しか生まれることができません。もし、もう一度生まれることができるならば、今までの経験をすべて生かして、最初から、人生を、その豊かな経験をもとに、送ることができる筈ですが、決してそういうことはできない訳です。未経験のまま、人生を始めなくてはならない。これも、人間存在の基本性格です。結婚についても、あらゆることについても、同様です。

今日の、この時間、この場で、この人と、このような状況で、「出会う」ということは、これまでに経験したことのないことです。よく知り合った長年の友達でも、その場、その時の「出会い」は、未経験のことです。そういう意味で、私たちの地球は、「経験不足／未経験の惑星」だ、というわけです。

そうだとすると、対話の相手の人が、どんな世界に生き、何を感じているかということ、これまでの知識や先入観でもって割り切り、こういうことを考えているに違いないとか、こうであるに違いないとか、分かってしまうことは、極めて危険だということです。その危険を避けるために大事なことはなにか。それは、「よく聴く」ということです。耳を傾けるということが大事です。それから、沈黙ということが大事です。人が、本当に自分の感じていることを考えていることを語り出すのは、安心することのできる、静かな沈黙の中からだからです。

斎藤喜博先生の授業の中から、少しご紹介してみたいと思います。耳を傾けて、人の言葉をよく聴くということは、子供はどのようにして学ぶのでしょうか。それは、先生が毎日の授業のなかで、子供の言葉によく耳を傾け、その様子を子供たちが、毎日、よく見ていることに始まるのではないのでしょうか。子供たちは、先生の言葉に耳を傾けることを学びます。また、先生が耳を傾けている、ほかの子供たちの言葉に、耳を傾けることを学びます。さらに、耳を傾けるということを学ぶようになります。斎藤喜博先生が、子供の言葉のこんな聞き取りをなさった報告をされています。

山村暮鳥の「子ども」という題の詩の授業です。

教材となった詩はこうなっています。「ぼさぼさの／生垣の上である／牡丹でもさいているのかと／おもったら／まあ、こどもが／わらっていたんだよ」。授業では、この「子どもの笑っている顔は大きいのか小さいのかということが問題になっていた、それに対して、一人の女の子が立ち上がって意見をだした。その女の子の言葉はこうです。

「なんだかね、その大きくても小さくてもね、その人の顔でね、そのちっちゃいならちっちゃいでね、そのちっちゃいぼたんが咲いているというような感じでね、そのぼたんがね、その大きいぼたんが咲いているというようにね、それでね、どっちにでもあてはまるんだけどね、なんだか、ちっちゃい方がね・・・」(斎藤喜博・柴田義松・稲垣忠彦・吉田章宏 編『教授学研究 61』国土社 1976年 36ページ)。

ほかの子供たちには、その女の子の言ったことが、何を言おうとしているのか、さっぱり分からなかったというのです。大学生も参観していたのですけれど、大学生にも分からなかった。で、斎藤先生は、その子の言うことに、じゃと耳を傾けて、その場で、こんなふうに解釈されて、子供たちに伝えた、ということです。

「なにかあの人は、大へんむずかしい、すばらしいことを云おうとしているらしいね。」「一つの同じ大きさのものが、大きくみえるときもあるし、小さくみえるときもある。ふだんは小さい俳優が、舞台上立つと大へん大きくみえるときがあるし、また反対に、ふだんは大きい人が、ある場所へ立つと、小さくしょんぼりと見えてしまうこともある。そういうことをあなたは云ったのですね」(同上 35～36ページ)。

「このように云うとその女の子は嬉しそうにうなずいた」ということです。

子供が、どこからかの借り物で間に合わせるのではなくて、深く考えて、自分自身の考えを紡ぎ出そうとするとき、その言葉は舌足らずになりがちなのです。「断片的に言ったり、くどくいつたりする」のです。子供の言葉に耳を傾けて、そこに意味を見だし、子供が何を言わんとしているのか、また、何を掴んでいるのかを、聞き取って、子供たちに返してあげる。その意味をふくらませて、豊かにして、子供に返してあげる、そういうことを、授業者としての斎藤先生はなさったのです。これが、対話です。

対話ということ、何か発言を沢山することだ、と誤解している場合もあります。そのように誤解すると、以上の授業とは全く反対のことが起こります。いわゆる「ハイハイ授業」です。子供たちは、クイズ番組での解答者のように、よく考える前から、先を争って、指名を求め、発言することを求めます。しかも、よく考えもせずに、覚えてきた答えを披露して、他者に認められることを求めるのです。学校は、知らなかった新しいことを学ぶところではなくて、既に知っていたことを、あたかも知らなかったことで、新しく考えだしたかのような振りをして、ご披露して、先生に褒められ、他の子供に対して優越感を抱いて得意になる場となります。そして、そこでゆっくり考えようとする、知らないこどもは、考える暇もないまま、知らなかった、考えることもできなかった、答えることもできなかった、ということで、劣等感を抱いて卑屈になる場ともなるのです。そして、騒がしいことが、活発であることだ、と誤解してしまうことさえ起こります。

ある小学校での授業『人間について』でのことです。林竹二先生が、何かを尋ねようすると、子供たちは、たちまち「ハイ、ハイ、ハイ・・・」と手を挙げるのです。で、林先生がおしっしゃたことは、「まだ、なんにも聞いていないよ」、でした。子供たちは、先生が尋ねようとしていることを先回りして想像して、それに対する答えを、先を争って答えようとする、ということが起こっていたのです。日常の授業が、その学級では、そのようになっていた、ということでもあります。確かに、クイズ番組では、質問を聞き終わらないうちにボタンを押さないと、競争相手に発言権を奪われてしまう、というような場合もあるようです。しかし、それでは、新たなものに出会って、驚き、変わることを通して、お互いに喜ぶ、というような、真の意味の「対話」がそのよ

「授業は対話である」

おわりに

うなことでは、起こるはずもありません。それぞれ、一人一人が、本気になって考えて、考えたことを、拙い言葉でも、ゆっくり、ぼつりぼつりと語る。その語った言葉をしっかり聞き取り、受け止めて、それをさらに豊かにして返す。そういうやりとりが起こった時、初めて、対話が起こった、と言えるでしょう。それがまた、授業が行われているということ、なのでしょう。それこそは、授業という、つまりそれぞれが、自分とは異なる世界に生きている独自な人々との出会いを通して、それぞれの世界を豊かにする場なのだ、と考えます。

授業では対話があり、その対話を通して、人と人との出会いがあり、そして、別れがある。それが、授業なんだ、そう私は、考えるのです。

授業は世界と世界の「出会い」です。「対決と交流」です。だから、「授業は対話である」とも言えるのです。

教育であるならば、強制して、対話させるのではなく、みずから進んで対話する人間を育てるのではなくてはならないでしょう。そのためには、教師自らが対話的な人間にならなければならないでしょう。心を開き、他者が語ることによく耳を傾けて聴く人間にならなければならないでしょう。他者の他者性と出会い驚き、喜ぶ人間にならなければならないでしょう。だが、この「なければならない」自体が、強制であってはならないでしょう。とすれば、教師自身が自ら対話を楽しむ、対話的な人間であること、そしてそのことに喜びを感じることに、このことが、待ち望まれていることになるでしょう。

一時間一時間の授業が出会いと別れの場です。そして、授業は対話です。人間は、対話において、喜びと驚きをもって、自己を解放し、自己を実現す。それが教育の仕事でしょう。先生方が、教育という素晴らしいお仕事を通じて、充実した生を送られることを、こころからお祈り申し上げます。

つたない話をご静聴くださり、ありがとうございました。